

巻 頭 言

愛知県小児科医会副会長
久野 邦義

勤務医36年

今年3月、36年間勤めた病院を定年退職した。前にもどこかに書いたが、研究者の才覚もなく、開業するだけの甲斐性も能力もなく、さらに、もともと大きな変化を好まない怠惰な性格で、結局1箇所にとどまってしまう。

それでもインターンを終えて入局したときは、人並みにしばらくは大学にいて研究なるものに取り組みたいと思ってはいた。しかし入局後まもなく始まった大学紛争の嵐のなか、若造の分際で、“義を見てせざるは”の思いで紛争の渦中にとびこみ、最終的には大学をでることになった(というより追い出されたといったほうがいいか?)。さいわい良きオーブンに拾われ後を継いで36年ということになる。この間、小児医療の進歩を目で見、肌で感じる事ができたのは病院勤務のお陰かと思う。その中でも特に新生児医療の進歩はめざましかった。もちろんここ10数年は残念ながら自分で手をだしてということは知識、技量、身体面でできなくなり、ある意味で傍観者のような立場だった。赴任して数年後、何回か流産をくりかえし、なんとか30週まで絶対安静でもたせて生まれた子がRDSで、産科病棟の端にある新生児室で、買ってもらったばかりのベビーバードにつないだものの助けられなかったとき、母親に“やはり私は子供には縁がないんですね”といわれたことが今思い出しても辛く、なんとか西三河にも新生児に対応できる施設をと部長や院長に頼んで、1959年愛知県下でも一般病院ではじめての新生児センターを立ち上げた。しかし当時現在のように超低出生体重児が、いわゆるインタクト・サーバイバルで高率に助かるなどは想像もできなかった。個人的には、病院

の全面移転や電子カルテの導入に院長としてかかわれたのはかけがえのない経験であったが、院長任期なかばで思いがけない病に倒れ、一時はギッシングの「ヘンリーライクロフトの手記」の一節、“このさき、幾たびの春にめぐり逢えるだろうか。楽観的な気持ちからすれば十度とも十二度ともいえるだろうが、私は控えめに、せめて五、六度とあえて望みたい。それだけでもずいぶんと沢山だ・・・”を痛切な思いでくりかえし読んだことが、今ではある意味懐かしく思い出される。

しかし自分にとって36年間の最大の喜びは、多士済々の能力的にも人間的にも優れた医師をはじめ、多くのよき医療スタッフに恵まれ、一緒に子供の診療ができたことに尽きる。先日S先生が大学で医学生に「小児科医の魅力」について数年前から講義をしてみえと聞き、先生ならきっとインパクトのある、説得力にあふれた話をしてみえだろうと思った。ひるがえってわが身にとって小児科の魅力、小児科医の喜びは何であったかと自問しても明快な答えは返ってこない。ただ、4月からある会社の診療所で産業医となり、新しい仕事も新鮮で、結構それなりに楽しんでいるが、週2回、もとの病院で小児診療にたずさわらせてもらうとき、何にもまして安らぎと喜びを感じることは確かで、やはりどんなかたちであれ、これからも小児の医療にもかかわっていきたいと思う。